

定朝様式継承の様態

— 法道寺阿弥陀如来像の場合 —

山崎隆之

はじめに

十一世紀中ごろ、定朝が完成した仏像の典型はその後永く造仏界に影響を及ぼし、数多くの定朝様式による仏像を造り出すことになった。しかし、表情の類似や寸法、比例の同一性など定朝仏との直接的な関係が確かめられる例は以外に少い。

たとえば定朝作品の中でも最も高い評価を得た西院邦恒堂の阿弥陀如来像が仏師院朝によって計測されたことはよく知られている。この計測の目的が何であったのかはわからないが、定朝仏についての貴重な記録として以後の造仏にも活用されたはずである。その計測値の使用例を探ることが定朝様式継承の実態を明らかにする手がかりとなるであろう。その第一歩として

法道寺阿弥陀如来像を例にその寸法的関係について検討してみる。

(一) 「仏の本様」の計測値

『長秋記』によれば長承三年六月十日仏師院朝は西院邦恒堂に参じ、「天下以是爲佛本様」と讃えられた定朝作の丈六阿弥陀如来像を計測した。計測は六三箇所に及び、中には意味不明の部位や計測漏れもあるようだが、日没となって衣文の数を知ることができなかったと記すなど像表面のすべてを把握しようとの意気込みが感じられる。何らかの造像に利用する目的があったのであろう。

西院像の計測値に関してはすでに毛利久氏の論究がある。^{〔註〕}その中で各数値が平等院阿弥陀如来像に近似することから像様も相似たものであろうとの結論が示されている。それは決して不当ではないと思われるが、毛利氏が比較検討した部位は一二箇所にすぎず、その平等院像の計測値も正確とはいえない。現在では奈良国立文化財研究所によって作成された写真測量による実測図があり、細部寸法の比較は一段と容易かつ正確にできるようになった。そこで、この実測図を用いて平等院像の各寸法を割り出し、西院像との異同を改めて確認しておく。

(表Ⅰ)

表には比較可能な箇所として三六箇所を取り上げたが、その

表 I 西院邦恒堂阿弥陀如来像法量表（平等院阿弥陀如来像との比較）

項 目	解 釈	西 院 像		平 等 院 像		
		寸 法(寸)	寸 法(cm)	寸 法(cm)	大小関係	差(大÷小)(%)
面(正面定也)	髮際～額	1尺7寸	51.5	51.4	西=平	1%以内
自髮際至眉間玉徑	髮際～白毫下	3寸5分	10.6	10.4	≒	2%
自髮際至睨	髮際～上睨	6寸4分	19.4	18.0	>	8%
自眉至髮際	髮際～眉	3寸2分	9.7	8.9	>	9%
二眉間		1寸5分	4.5	4.4	=	1%以内
眉(絃定)		6寸	18.2	19.4	<	7%
自睨眉下		2寸7分	8.2	8.9	<	9%
二目間	兩目頭間	2寸8分	8.5	10.2	<	20%
自髮際至鼻上	髮際～鼻下	1尺 8分	32.7	32.9	=	1%
目上下綻		5分	1.5	2.2	<	32%
鼻下横	小鼻張	4寸2分	12.7	12.9	←→	2%
同下ヨリ至唇上	鼻下～上唇(人中)	1寸4分	4.2	4.0	>	5%
同穴下ヨリ至唇上	小鼻下～上唇	1寸5分	4.5	4.9	<	8%
上下唇	唇厚(中心)	1寸3分	3.9	4.0	→←	3%
自上唇端至鼻下	鼻下～上唇(上端)	1寸1分半	3.5	3.5	=	1%以内
小頤横	小頤幅	5寸7分	17.3	16.5	←→	4%
小頤至唇下	下唇～額	3寸	9.1	10.4	<	14%
三道 上		1寸3分	3.9	4.4	<	13%
中		1寸7分	5.2	5.4	≒	4%
下		2寸	6.1	5.9	→←	3%
惣	合計	5寸	15.2	15.8	≒	4%
左右頰間	面幅	1尺8寸	54.5	53.4	→←	2%
左右耳間	耳張	2尺3寸4分	70.9	69.4	→←	2%
二耳垂内間	兩耳朶付根間	1尺6寸	48.5	48.5	=	1%以内
頸横(當三道中定也)	首幅	1尺4寸5分	43.9	42.7	←→	3%
左右肩間(自下三道三寸二分下定也)	肩幅	4尺6寸6分	141.2	141.6	=	1%以内
左右臂間	肘張	5尺6寸3分	170.6	166.8	→←	2%
左右手(定印也)		2尺1寸5分	65.2	68.4	<	5%
左右足指	兩足指先間	5尺5寸	166.7	166.8	=	1%以内
左右膝間	膝張	7尺7寸	233.3	226.5	>	3%
膝敦	膝厚	1尺5寸	45.5	40.0	>	14%
自髮際至乳	髮際～胸乳	4尺4寸6分	135.2	134.4	=	1%以内
自髮際至腹皺	髮際～腹線	5尺 5分	153.0	152.6	=	1%以内
手高	定印厚	7寸	21.2	20.7	≒	2%
自座面至髮際	髮際高	8尺	242.4	240.6	=	1%以内
自臂下至花實面	臂下～像底	1尺9寸	57.6	48.9	>	18%

うち明らかな差異が認められるのは髮際、眉、髮際、眼、両目頭間等数箇所、他は概ね近似し、ほぼ完全に一致する箇所もある。まず、髮際高は実測図が二四〇・六センチ（七尺九寸四分）と八尺に満たないが、その差は一パーセント以下でほとんど無視してよい誤差であろう。同様に肘張も膝張も近似し、両足指間は完全に一致している。ただ、膝厚は西院像の方が厚く、安定感のある像であったと想像される。

頭部では髮際、額はほぼ同寸だが面幅、耳張は心持ち広めである。しかし、その差は二パーセントで造形上大きな影響はないであろう。強いていえば「尊容如満月」と形容される定朝仏としては西院像がより相応しいことになろうか。問題は髮際、眉、髮際、眼とともに平等院像に比べ大きく、その差は各九パーセント、八パーセントに達する。髮際、鼻はほぼ同寸なので西院像の方がやや眉目が下がり、結果的に鼻が少し短めになる。この点に関連して、『長秋記』に注目すべき記事がある。

長承三年六月四日、鳥羽御堂の造仏についての検分が行なわれ、仏師賢圓の仏像が「御佛鼻頗短少也」と批評された。これに対し源師時は「西院佛、其鼻小様所見給也」との意見を述べ、その欠点を正当化している。その後の改直すべき項目の中には鼻は含まれていないので、鼻の修正は免れたのであろう。鳥羽御堂の造営には平等院も参考にされており、鼻が短いのは定朝仏の中でも西院像のみに見られる特徴と考えられる。おそら

く平等院像は池の対岸から遠望するのに対し、西院像は堂内で見上げるために目の位置を下げる必要があったのだろう。それが鼻の短さとして印象づけられたのかも知れない。

鼻の短さが目を下げた結果であり、それが像に対する視点の違いに起因するものとすれば、西院像と平等院像の間には作風上の差はないと考えられよう。多くの寸法上の一致または近似は両像が同一寸法で設計されたことは明らかであり、毛利氏の「恐らく今日の鳳凰堂本尊に最も酷似した」ものとの想定は十分納得できる。西院像は遅くとも天喜二年には完成しており、天喜元年作の平等院像とはほとんど同時期で、その間に大きな様式展開があったとは考えにくい。^{〔註2〕}（図一）

ところで毛利氏は両像の寸法的近似の背景として木割法の存在を想定されている。この場合、木割法とは単なる寄木造の技術でなく、「細部寸法の結果」を伴う木割法もしくは造像比例法を意味する。この点を少し考えておこう。

本格的な造像比例法の記録上の初見は久寿二年頃と推定される『十六羅漢記』所収「仏の寸法」であり、実際の作品の上でいわゆる錐点によって造像比例の存在が確認できる例は今のところ鎌倉時代を遡り得ない。^{〔註3〕}「仏の寸法」も錐点保有像も口の位置を重視しており、髮際、口を髮際高の十分の一（坐像では五分の一）の基準単位としている。口の位置は作例により唇中心、下唇端、唇下などがあり、試みに実測図により平等院

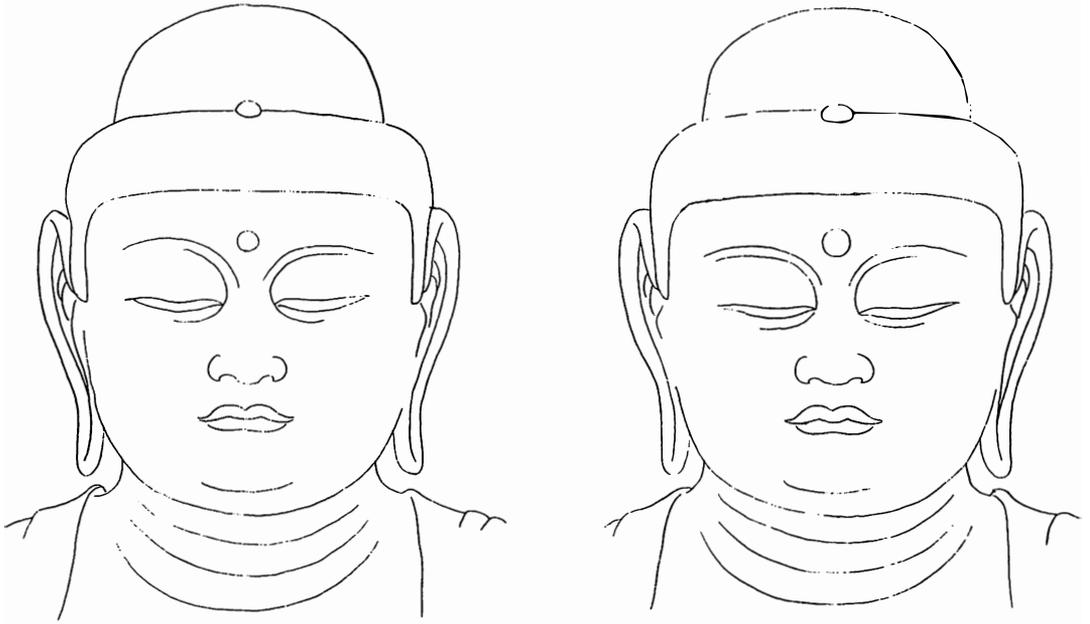


図1 西院邦恒堂阿弥陀如来像復元略図（右図）

平等院像（左）に比べ眉・目の位置が低く面幅がわずかに広い。

像の髪際と口を求めるとそれぞれ三八・五センチ、四一・〇センチ、四二・五センチとなり、髪際高二四〇・六センチとの関係は六・二五分の一、五・八七分の一、五・六六分の一となつてどれも基準とはなりにくい。これとは別に髪際と顎が髪際高の八分の一になる比例法もあるようだが、^{（註5）} 平等院像の髪際と顎は五一・四センチ（四・六八分の一）でやや小さい。これらの点から考えて平等院像の各部分が比例的な相関関係にあるとはいえない。

毛利説には多少の問題があるとはいえ、平等院像をもって定朝様式の典型とすることに異論はない。「仏の本様」と評された西院像がその後の仏像の規範としてどんな影響を及ぼしたかという問題については、各々の像と平等院像との類似点を探ることで解明の糸口が掴める訳である。

（二）法道寺阿弥陀如来像の計測値

大阪府堺市にある法道寺阿弥陀如来像は来歴は不明ながら十二世紀後半に遡る優品である。^{（註5）}（写真1）堺市博物館に展観されてはじめて知った像だが、等身像にしては頭部が小さめで一見して平等院像の縮小版ではないかとの印象を持った。像容の面でも定印の組み方が指を交互に挟む平等院像と同型式であり、類例の少ない八角裳懸座であることも注意を引いた。（写真2）西院像が裳懸座であったことがわかっており、平等



写真2 法道寺阿弥陀如来像裳懸部



写真1 法道寺阿弥陀如来像

院像にも裳懸の痕跡があつて法道寺像がこれらの定朝仏と何らかの関係がありそうに感じられたのである。

今回、寺側の好意により調査の機会を得たので西院像の計測にならつて計測してみた。その結果を以下に掲げる。(表Ⅱ)表中の右側に西院像、平等院像の計測値を記した。括弧内の数字は各像が法道寺像の何倍であるかを示す。各数字は多少バラつきはあるものの平均すると約三・二倍となる。これを基準として西院像、平等院像の相違点に注目すると、膝高、膝張は西院像に近く、面部のうち面幅、耳張は平等院像により近い。また西院像の特徴である髪際、眉、髪際、臉については前者が平等院像に、後者が西院像に近いという結果が得られた。

以上のことから法道寺像の製作にあつて西院像など定朝仏のプロポーションが強く反映していることが明らかとなった。定朝仏の計測は院朝のほか康助も行なつており、それらの計測表が転写されながら各仏所に伝えられたことは十分考えられることである。それが適宜縮尺され各種の造像に利用されたのであろう。ここで法道寺像にどんな縮尺法が用いられたかを推測しておこう。

丈六像を二等分して八尺像、さらにそれを二等分して四尺像とするのは簡単だが、法道寺像は髪際高七六・一センチで約二尺五寸、立像なら五尺の等身像である。これは丈六像の三・二分の一に相当し、縮尺計算は一見複雑そうである。縮尺を簡便

部 位	法道寺像	西院像		近似比較		平等院像	
	寸 法	寸 法	比 率	西	平	寸 法	比 率
髮際高	76.1 cm	242.4 cm	×3.19	◎		240.6 cm	×3.16
髮際～胸乳	42.5 cm	135.2 cm	×3.18	◎		134.4 cm	×3.16
髮際～腹線	46.6 cm	153.0 cm	×3.28		○	152.6 cm	×3.27
肩張	46.4 cm	141.2 cm	×3.04			141.6 cm	×3.05
肘張	53.6 cm	170.6 cm	×3.18	◎		166.8 cm	×3.11
膝張	72.6 cm	233.3 cm	×3.21	◎		226.5 cm	×3.12
両足先間	51.2 cm	166.7 cm	×3.26	○	○	166.8 cm	×3.26
髮際～顎	16.1 cm	51.5 cm	×3.20	◎	◎	51.4 cm	×3.19
面幅	16.6 cm	54.5 cm	×3.28		◎	53.4 cm	×3.22
耳張	21.8 cm	70.9 cm	×3.25		◎	69.4 cm	×3.18
首幅	12.6 cm	43.9 cm	×3.48			42.7 cm	×3.39
両目頭間	3.0 cm	8.5 cm	×2.83			10.2 cm	×3.40
小鼻張	4.1 cm	12.7 cm	×3.10		○	12.9 cm	×3.15
髮際～眉	2.8 cm	9.7 cm	×3.46		◎	8.9 cm	×3.18
髮際～上脣	6.1 cm	19.4 cm	×3.18	◎		18.0 cm	×2.95
三道幅 (合計)	4.4 cm	15.2 cm	×3.45			15.8 cm	×3.59
			(平均) 3.22				(平均) 3.21

表Ⅱ 法道寺阿弥陀如来像法量表（西院像、平等院像との比較 ◎良く似ている、○似ている）



写真3 法道寺阿弥陀如来像頭部

に行なう一案として縮尺ものさしを作る方法を考えてみよう。まず一寸六分を一寸とするものさしを作り、各数値を計り直す。これにより丈六像の寸法は特別尺の一〇尺に換算される。この数値をそのまま普通尺で用いれば一〇尺像に、二等分、つまり一寸を五分とすれば五尺像になる。また、六尺像や三尺像を造るのも一寸を六分、三分に換算することで容易に解決できる。^(註6)

法道寺像はたとえば安楽寿院像と比べると甘美な親しみ易さは無く、幾分明快で取りすましたような感じがある。しかも、大きめの肉髻、横に広い額など平等院像を思わせる部分もあり、形状の面だけでなく造形的にも定朝仏を意識していることが認められよう。(写真3) このように定朝仏の面影をとど

めた仏像は十二世紀頃の諸像中に少からず存在するものと思われる。

(三) 定朝様式継承の諸相

定朝が完成した様式は子息の覚助と弟子の長勢に受け継がれた。覚助の作品は現存しないが、『古事談』の逸話によれば定朝も認めるほどの名手であったと伝えられることから、平等院雲中供養菩薩中でもとくに出来の良い北二十五号に彼の作風を想定することも可能であろう。^(註)長勢の作風は広隆寺日光・月光菩薩像に見る通り、構成にやや弱さはあるものの肉身の丸味、彫り込みの浅い、しかし明快な形の表現は定朝に通じるものである。彼が定朝没後の造仏界で重きをなしたのも当然のことと頷ける。この定朝継承の第一世代に対し、第二、第三の世代となるとその作風にそれぞれ微妙な差異が現れて来る。

長勢の子、円勢については最近仁和寺旧北院薬師如来像が発見されてその作風の一端が明らかになった。北院像は円勢が法院位に登った翌年、康和五年(一一〇三)に長子長円とともに造立したもので、いわば彼の円熟期の作風を示しているといえよう。その形態は平等院像とは違い頭体の比例が童形に近く、ずんぐりと小さくまとまっている。そのプロポーションに小像としての配慮があるかも知れないが、平等院像の伸び伸びとした肢体とは大分違う。顔付きも童顔で、とくに眉、目の大きさ

に対し、鼻、口の小さいのが目につく。伊東史朗氏はこの作風を康尚晩年の作風を伝える広隆寺千手観音坐像(寛弘九年、一〇一二)に通じるものとして彼が長勢の影響から脱し、「康尚様式に独特のおぼろな感覚を採り入れて、定朝仏のもつ明快さから離れたところに、彼独自の和様を求めた」結果と分析している。^(註)それは定朝至上の時代にあつて危険な賭けでもあつたし、逆にいえば彼の自信の頭れでもあつたのであろう。

円勢の二人の息子のうち長円は安楽寿院阿弥陀如来像を彼に近い作品と見るならば、^(註)その作風は定朝様式を踏襲するものである。しかし、そこには平等院像のような明快な張りのある造形は姿を消し、繊細化、形式化が進み、造形的な甘さが現れている。

賢円に関しては作品は伝わらないものの、先述した『長秋記』の記事が彼の作風を推測するヒントになる。当時彼は鳥羽御堂の造仏を担当しており、その製作中の検分で鼻が「短小」との批評を受けた。これに対し源師時が西院邦恒堂の仏像を例示して取りなすのだが、鳥羽御堂の造営は平等院と三条俊綱堂に範が求められており、仏像のモデルも両寺の仏像であつたかと思われる。このエピソードによって西院像も鼻が短いことがわかり、これについては既に寸法的に確認できた。しかし、賢円の仏像の鼻が「短小」なのは彼が独断で西院像をモデルにした結果ではなく、円勢の北院像に見るように彼が円勢から受け継い

だ父子共通の造形的性格だとは考えられないだろうか。それは伊東氏の見解にしたがえば康尚を原点とするものであるが、彼らの肉体的特徴などに起因する造形的な癖とみることもできよう。こうして見ると、長勢の系統である三人の仏師のうち、長勢の作風を継ぐのは長円のみで、他は独自の方向を模索しているように思われる。

一方、覚助の子と伝えられる頼助、院助には作品も作風を想像させるエピソードも無いが、頼助の子康助、院助の子院覚には判断材料がある。康助の作風については武笠朗氏の論考が参考になる。^(註10) 彼は奈良に基盤を置きながら中央でも通用する保守性を持っていた。また、古典造形や図像についての関心も高く、それが彼の作風にも反映しているという。そして、彼の作品として高野山谷上大日堂大日如来像を提示する。この像は部分的にのちの慶派に通じる要素を持ちながらも基本的には定朝様式を継ぐものであり、その忠実度は安楽寿院像を越えている。彼は日野新堂の造仏に際し定朝作と推定される旧仏の採寸を行っており、この定朝研究が彼の作風形成に反映していることは十分考えられる。

院覚については作品と記録の両面から定朝への傾倒ぶりが知られる。彼の作品とされる法金剛院阿弥陀如来像（大治五年、一一三〇）はプロポーションは別にして顔の造作は平等院像と良く似ている。彼は平等院の仏像を定朝作と鑑定したり、院朝

による西院像の計測に立ち会うなど定朝研究者としても認められていたようで、その成果が法金剛院像の表情に反映しているのである。ただ全体に表現は硬く単調で、造形水準の点では平等院像に遠く及ばない。

以上のことから当時の造仏界で定朝様式を積極的に継承しようとしたのは中心的勢力であった長勢系の円派ではなく、覚助系の康助や院覚であるということがわかる。それは長勢が弟子であるのに対し、彼らが定朝の血統を引くことから当然のことのように見えるが、定朝の様式を継承しうる条件としてはむしろ長勢系の方が恵まれていたのである。

長勢系は各世代の仏師の活躍期が重なって直接にその造形的遺産を手渡すことができた。彼らは定朝を知識としてでなく皮膚感覚的に授受できたはずである。そのいわば体質化した定朝的造形——球体を基本とし、そこに最小限の高低差で表された微妙な表面造形——を土台としながらもそこに安住することなく定朝とは一味違った繊細・優美な表現に到達した。それが院政期の美意識にも適ったということなのだろう。

これに対し覚助系では彼が比較的早く没したこともあって第二、第三代との連絡がスムーズに行かなかったのではないかと思われる。たとえば長勢の子円勢が法橋位につくのは長勢が亡くなる八年前のことだが、院助は覚助の没年と同時、頼助にいたっては没後二六年もかかっている。頼助系（康助—康朝）

はその後奈良に活動の場を移し、徐々に定朝様式から離れて鎌倉新様式を準備することになるのでここでは問題外だが、院助系の院覚の場合、院助の没後二二年も経て法橋になっている。

彼の最初の事跡が記録上現れるのはそれ以前であるが、それでも院助没後六年のことである。院覚がたとえ定朝の血筋を引くとしても様式継承の点では断絶があつた可能性は否定できない。むしろ、このような不利な条件下にあつたからこそ、彼が造形的バックボーンを必要を感じ、それが定朝研究へ向かわせる要因となつたのであろう。ただ残念ながら、彼の定朝研究は造形技術の段階には至らず、形式上の問題にとどまり、いわば知識の集積の域を出なかつた。だから定朝仏の観察において、彼は線的な形は把握できても微妙な面の感じまでは掴めなかつた。それが法金剛院像の硬さとして現れているのであろう。

一般に絵画の模写では線で表される形および形相互の関係を正確に写せばよい。しかし立体造形である彫刻では線のように見えるのはすべてその両側に展開する微妙な傾斜面の接点である。また線的な形で現れない部分にも複雑な面の起伏がある。これらの面の詳細を正しく読み取らなければ模刻は成功しない。法金剛院像では輪郭線のように見える目や唇の形は似せることができたが、それらの背後に横たわる面の起伏が再現できていない。そのためにやや生命感に欠ける硬い表現になつてしまつたのである。

結びにかえて

定朝以後の仏師達にとつて定朝受容の仕方には直接的、間接的の違いがあるとともにその対応にも微妙な差がある。それが一口に定朝様式とされる仏像の間にも現れ、多様な作風が展開される。法道寺像はそのような定朝様式の仏像としては定朝志向の強い作品に属し、様式継承の実態を考察する上で重要な作例といえる。今後さらに調査が進み、各種の定朝痕跡をとどめる像が発見されれば定朝様式の実像を探る上でも、各流派の特質を探る上でも大いに参考となる。

なお調査にあつては法道寺御住職のご高配と堺市博物館吉原忠雄氏、張洋一氏のご協力をいただいた。ここに記して謝意を表す。

註

- 1 毛利久「西院邦恒堂の阿弥陀如来像」『史迹と美術』一八一 昭和十二年
- 2 両像はともに「尊容如満月」と讃えられているが、寸法的には西院像の方が丸顔でより相応しいように思われる。これを造形的進展とみるこ
- 3 拙稿「仏像の造像比例法——錐点について」『愛知県立芸術大学紀要』十六 昭和六十二年
- 4 浄土寺阿弥陀如来像では髪際高四八・五センチに対し、髪際〜顎六

- 二・五センチで約八分の一となる。
- 5 堺市博物館図録「和泉地方の仏像」昭和六十三年「大坂の仏像」平成三年
- 6 康助の史料中に一搦手半（＝七寸五分）を単位とする特殊なものさしの記事がある。これは仏師尺とも呼ばれ、周丈六像などの基本尺として用いられたかと思われる。仏師たちが必要に応じて独自のものさしを工夫したことは十分考えられる。
- 7 水野敬三郎「大仏師定朝」『日本の美術』一六四 至文堂 昭和五十五年
- 8 伊東史朗「仁和寺旧北院本尊薬師如来檀像について」『仏教芸術』一七七 昭和六十三年
- 9 武笠朗「安楽寿院阿弥陀如来像について」『仏教芸術』一六七 昭和六十一年
- 10 武笠朗「奈良仏師康助と高野山谷上大日堂旧在大日如来像」『仏教芸術』一八九 平成二年